

福井県三国町真宗寺院の成立事情

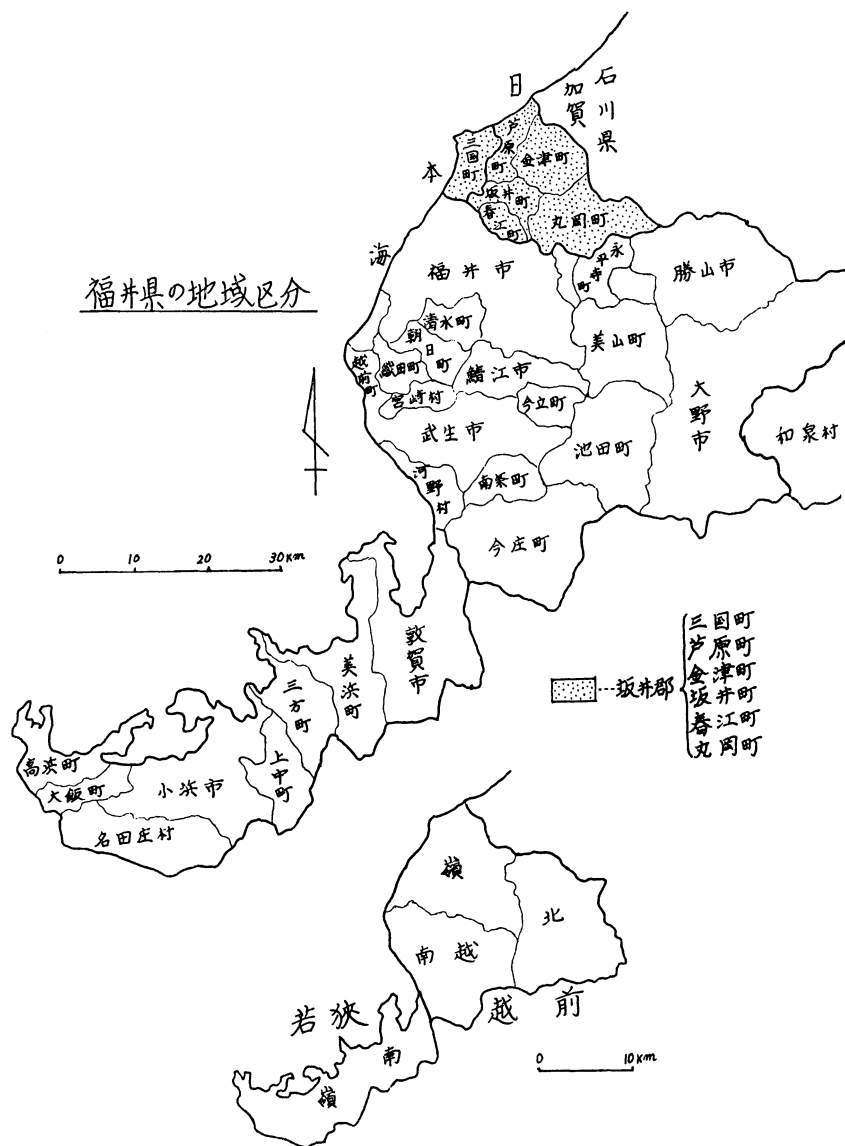
佐々木 空 慧

(高田学会)

一般に寺院成立の背景には一、仏教史的要因あるいは宗派史的要因と、二、地理的要因の二者が認められる。三国町の真宗寺院について眺めた場合、特に後者の地理的要因が顕著である。このことを具体的に明らかにするのが、本論の趣旨である。

一 三国町の概要

福井県は北半分の越前と、南半分の若狭から成るが、三国町は越前国えちぜんに属し、加賀国に隣接する坂井郡の西部に位置している。西北は日本海に面し、南は福井市、東は芦原町・坂井町に接する。東西約七・五キロメートル、南北約一一キロメートル、北方の加越台地と南方の平野部に二分される。加越台地はさらに、漁業を主とする海岸集落すなわち雄島地区と、畑作中心の農業集落すなわち加戸地区に分けられ、また平野部は九頭竜川西部の砂丘地帯である浜四郷地区と、九頭竜川東部の沖積平野、本荘・木部地区に分けられる。そして竹田川と九頭竜川が合流する河口右岸



に、古くから三国湊と呼ばれた旧三国・滝谷が、また河口左岸には新保があり、三国町の中心となっている。

三国湊及び周辺集落の起源は明らかではないが、中世期興福寺領坪江荘に属し、隣接する河口荘とともに、北国最大の荘園を形成していた。そして三国湊には、前記両荘園を初め、越前七郡の各荘園から貢納物が集結し、その運送・販売に従事する問丸が出現し、著しく商業的性格を帯びるようになった。

江戸時代に入ると、福井藩城下町の外港として繁栄し、西廻り海運業の一大中心地となった。江戸時代末期から明治にかけての最盛期には、湊に千石積の弁才船べざいせんが去来し、下町しもまちには森田・内田家等豪商の廻船問屋が、いらかを並べていたといわれる。

しかし明治時代になると、大型帆船の発達や、河川堆積物による港湾機能の低下などにより衰退し、そして更に明治三〇年の国鉄北陸線の開通により、決定的な打撃を受けた。陸上交通に物資輸送の機能を奪われた三国港は、その打開策として三国支線を開通させたが、結局成功を見ずに終った。大正期に入るとようやく漁業基地として再生し、現在に及んでいる。

幕末から明治にかけての本町の隆盛は、その経済的繁栄を背景に、独特の町人文化の発展を促し、仏壇・彫刻等の美術・工芸品には見るべきものが少くない。また三国港から浜地浦に至る岩石海岸には、東尋坊・雄島・越前松島など景勝の地が多い。

三国町が属する坂井郡は、「福井県の穀倉」と呼ばれる浜野―坂井平野―を有することで知られるが、本郡は宗教的な面でも、古来重要な役割を果たしてきた。すなわち、

一、坂井郡丸岡城下の東方の谷間には、白山信仰と結んだ豊原寺の跡がある。豊原寺は平泉寺（現勝山市）と同様多くの僧兵を抱え、盛時には豊原三千坊と称され、東の竹田谷まで寺塔が並んだといわれている。

二、九頭竜川河口三国には、かつて天台宗の古刹千手寺せんじゅじが繁栄した。千手寺の開基は、白山の開山として知られる泰澄大師たいぢようだいしと伝えられる。

三、坂井郡の東北方加賀・越前の国境には、室町中期本願寺八世蓮如により開かれた吉崎がある。吉崎は蓮如の布教以来、北陸における本願寺教線拡張の根拠地として栄え、今日に及んでいる。

四、加賀・越前の国境から九頭竜川に至る坂井平野一帯は、長享から弘治にかけての凡そ七、八〇年間、加・越一向一揆の主戦場であった。

五、金津町の東部熊坂くまさかには天正年間、真宗高田派の本山専修寺が創建された。織田信長越前來攻の際には、熊坂専修寺を初め高田派諸寺はこぞって信長に味方し、本願寺勢力と対抗した。

六、坂井郡の南で隣接する吉田郡には、道元を開基とする曹洞宗の本山永平寺がある。

前記一〜六の中二は、直接三国町に関する事項であるが、二以外も総て三国町に関連がある。特に三国町真宗寺院の起源について考察する場合、三を無視することはできない。四年二ヶ月に及ぶ蓮如の巧みな吉崎布教によって、県内外の多くの寺院が本願寺派に変わり、また多くの本願寺派寺院が誕生したと思われるが、それが吉崎と同郡にある三国町では、どの程度現われているだろうか。

二 三国町各宗派の現況

三国町には浄土真宗を初め、真言宗・浄土宗・曹洞宗・日蓮宗等の諸派寺院が現存し、道場・支坊等の準寺院も含めれば、その数六四に及ぶ。

三国町に現存する宗派別寺院数

宗 派 名		三 国 港 の 数 三 寺 院	周 辺 村 落 の 数 周 寺 院	合 寺 院 計 数
浄 土 真 宗	大 谷 派	9	12	21
	高 田 派	4	12	16
	本願寺派	5	4	9
	出雲路派	0	1	1
	計	18	29	47(72%)
真 言 宗		3	0	3
浄 土 宗		2	2	4
曹 洞 宗		3	0	3
日 蓮 宗		2	2	4
如 来 教		0	1	1
単 立		0	2	2
総 計		28	36	64

昭和63年 現在

この中で何といっても最も多いのは真宗寺院であり、四七か寺、三国町寺院総数の七三パーセントを占めている。福井県全体で真宗寺院の占める比率は五六パーセントであり、坂井郡のそれは七六パーセントであるから、三国町において真宗寺院の占める比率は、福井県のそれを遙かにうわまわり、坂井郡のそれに近いことがよく分かる。

福井県は隣接する石川県とともに、古くから阿弥陀仏を本地とする白山信仰が盛んであり、鎌倉時代になると時宗教団が発展し、またこれら庶民の念仏信仰の素地の上に、高田願智の越前巡化や、三河系高田教団の流れをくむ如導^{きようどう}の布教活動によって、真宗信仰が早くから根づい

ていた。しかし何といっても、真宗の急激な発展をもたらすきっかけになったのは、戦国時代の初期文明年間における蓮如の、吉崎を中心とする積極的な布教活動である。

蓮如の吉崎在住と布教活動によって、虎狼^{ころう}のすみかといわれ、家一つない丘陵であった吉崎が、たちまち二〇〇の棟を連ねる寺内町に生まれ変わったといわれる。坂井郡内に特に真宗寺院が多く、また三国町に真宗寺院が

多いことも、蓮如の吉崎布教の影響として、容易にうなづけるところである。

真言宗三か寺の中には、古来三国湊と盛衰を共にしながら今日に及んだ滝谷寺（滝谷一丁目）・性海寺（南本四丁目）や、近年（昭和四十年）三国緑ヶ丘高台の地に誕生した、成田山別院九頭竜寺がある。いずれも京都智積院を本山とする、新義真言宗智山派の寺院である。

浄土宗には、西光寺（南本二丁目）・月窓寺（神明一丁目）・円海寺（新保）等がある。浄土宗は、以前は浄土宗・黒谷浄土宗・西山禅林寺派等、いくつもの宗派に分かれていたが、現在は浄土宗と西山禅林寺派の二派に統一されている。三国町の四か寺は、いずれも前者に属する。

禅宗は曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の三に大別できるが、福井県では何といっても、曹洞宗本山永平寺があるだけに、曹洞宗寺院が多く、その数二九三、県内禅宗寺院の実に七九パーセントを占めている。三国町所在の恵雲寺（山王一丁目）・久昌寺（北本一丁目）・金鳳寺（北本三丁目）は、もちろん曹洞宗寺院である。

日蓮宗にはいわゆる日蓮宗の外に、日蓮正宗・法華宗・本門法華宗・顕本法華宗・法華日蓮宗等多くの宗派があるが、三国町の妙海寺・妙見山・妙信寺等はいずれも日蓮宗に属している。中でも妙海寺（山王二丁目）は、室町末期に創建された日蓮宗の古刹として知られている。

次に如来教であるが、この本山は名古屋にあり、托鉢修行を重視することであるが、それ以外は詳細不明である。

三国町には、いずれの宗派にも属しない単立寺院が昭和六十一年現在で二か寺ある。この中の一か寺は、ある特定の信仰にもとづき、初めから単立無宗派の寺院として創建されたもの、他の一か寺は、初めはある宗派に属していたのだが、その宗派内に内紛が起こり、それをきっかけにその宗派から離脱、単立化したというケースである。

三 三国港の寺院

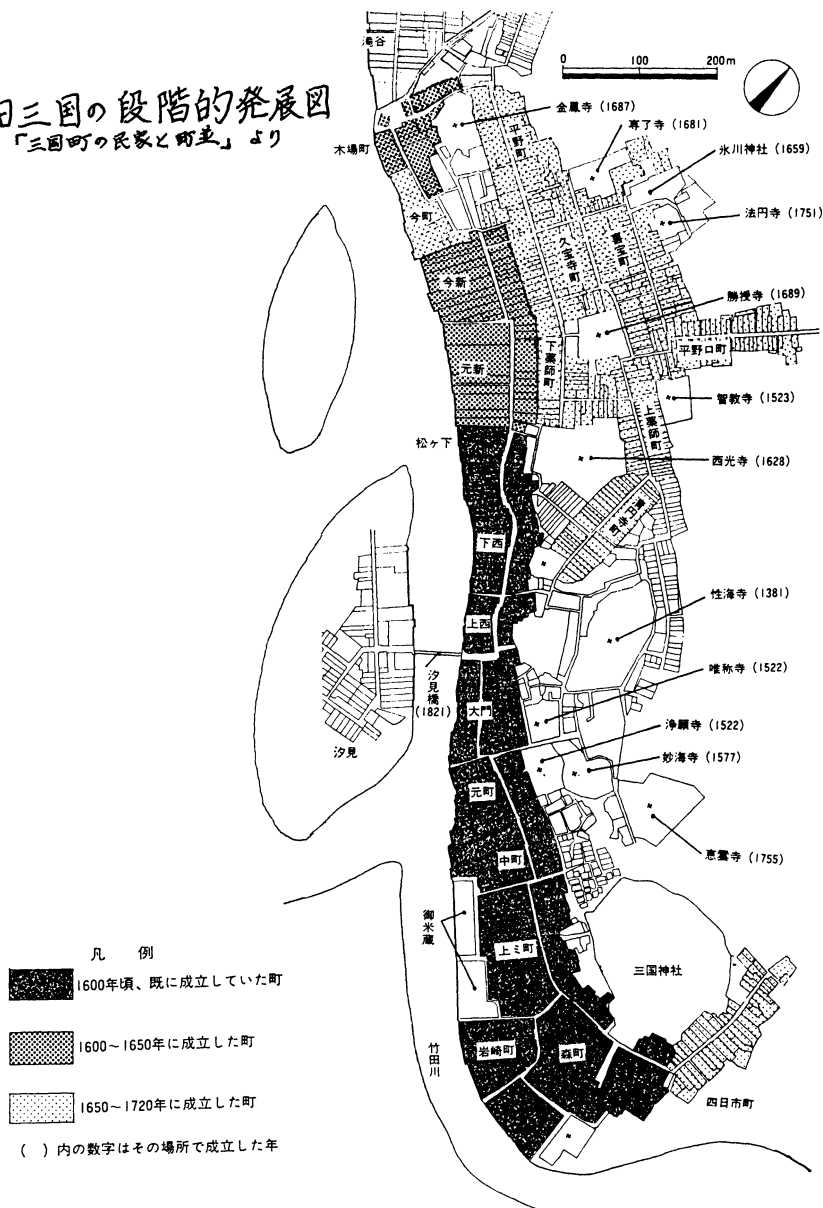
中世期、現在の三国神社の周辺、標高三〇メートルほどの丘陵は、前面に九頭滝川・竹田川が流れ、背後に低湿地を持つ天然自然の要害であった。この丘陵地を背後にして、上ミ町・中町・元町・大門・上西・下西あたりが、中世末期他に先がけて集落の発達をみた。白山千手寺の跡地に創建された性海寺（真言宗）・妙海寺（日蓮宗）・唯称寺（大谷派）・浄願寺（大谷派）は、いずれもこのような早期集落形成の中で誕生した、三国湊初期の寺院である。ここに白山千手寺とは「越の大徳」泰澄の創建と伝えられる天台宗の古刹である。

江戸時代に入ると、港としての機能が充実し、集落も益々発展をとげ、森町・松ヶ下辺りが成立した。森町には鍛冶屋が多く、また松ヶ下は遊廓の町として知られる。松ヶ下西光寺（浄土宗）の現在の位置が、当時における、川下の方の町の外延部に当たると考えられる。同寺の墓地に三国小女郎の墓があることなども、このことを裏付けけるものである。

十七世紀半ば頃までに、木場町辺りにまで集落が拡大したが、さらに十七世紀後半、寛文頃になると、西廻り航路の開拓によって、三国湊は日本海有数の寄港地となった。それとともに市街域も益々拡大し、川下の方向では四日市町が誕生し、また今新と木場町の間に今町ができた。

こうして川沿いのほとんどが人家で埋まると、今度は未開発の山側の台地に向かって開発が進んでいく。十七世紀後半以後になると、標高六メートル程の台地にも人家が建ち、従来とは違った直線上に直交する計画的道路が造成される。勝授寺（本願寺派）や牛頭天皇社（現在の氷川神社）等が、現在地に建てられたのはこの頃である。

旧三国の段階的发展図 「三国町の民家と町並」より



この市街地拡大により生まれた新開地が上ハ新町であり、下薬師町・久宝持町・平野町・喜宝町に分かれていた。上ハ新町には小商人や職人などが多かったが、これに対して従来の川沿いの町すなわち下町には、森田家のような問屋商人あるいは大商人が多かった。

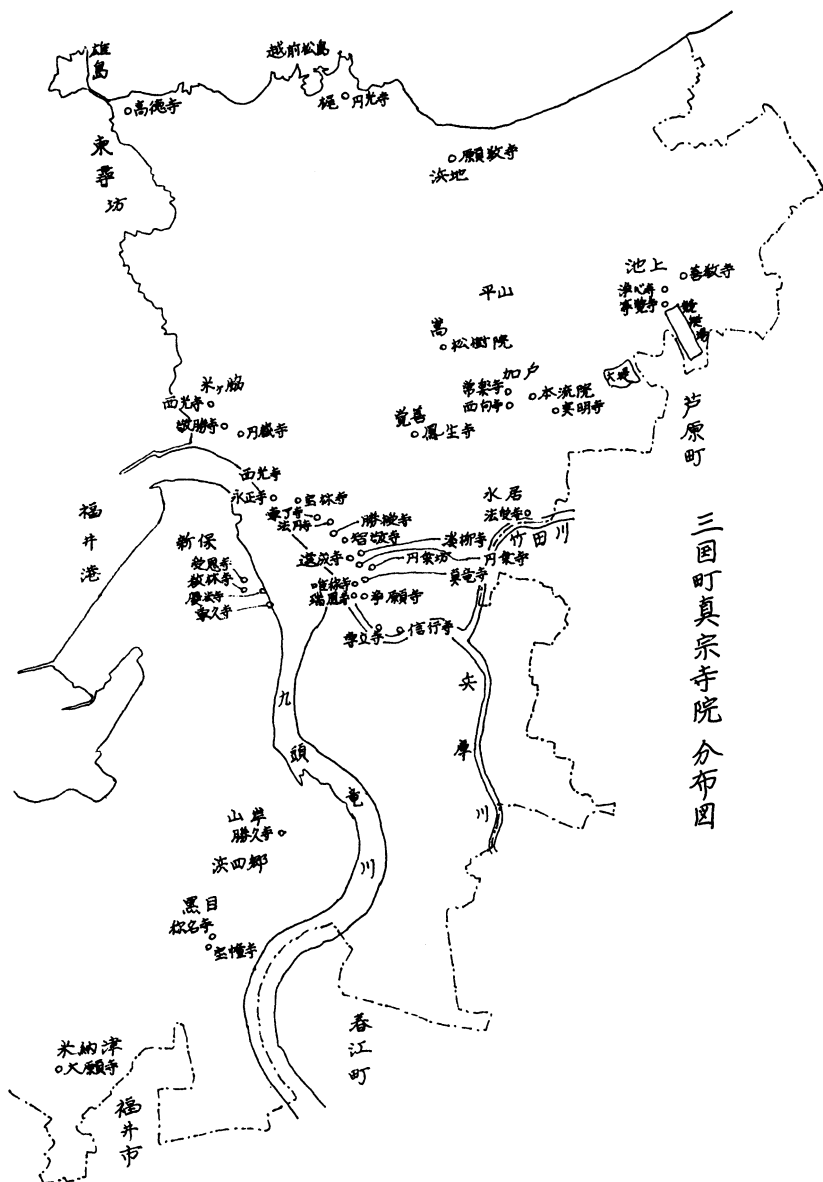
上ハ新町の中心は、現在の氷川神社周辺部にあった歓楽街で、遊廓の中心もこの頃になると、松ヶ下からこの新開地に移っている。前記勝授寺・氷川神社の外、法円寺（高田派）・専了寺（大谷派）・金鳳寺（曹洞宗）等は、いずれもこの新開地時代に生まれた寺院である。

以上の記述を要約すると、三国港の集落・市街域は上手から下手にかけて発展した。そして三国港の寺院もまた、宗派の如何をとわず、集落の拡大に相応して、上手から下手に向かって建立されていった。開基年代が上手の寺院ほど古く、下手にいくほど新しいことが、このことをよく示している。

四 一向一揆と唯称寺・勝授寺

三国町に現存する真宗寺院四七か寺の中から著名なものをひろうと、西光寺（大谷派、米ヶ脇）・勝授寺（本願寺派、南本二丁目）・唯称寺（大谷派、山王二丁目）・浄願寺（大谷派、山王二丁目）・本流院（高田派、加戸）・松樹院（高田派、嵩^{だけ}）・称名寺（高田派、黒目^{くろめ}）等があげられる。またこの外、女流歌人^{かせん}哥川に縁故の深い寺として知られる永正寺（大谷派、神明二丁目）も忘れてはならない。

これら真宗寺院は、その創建年代より見て、三種に大別することができる。まず第一は、親鸞の関東教化を直接的機縁とし、親鸞面授の弟子、または親鸞有縁の信徒によって創始されたと伝えられる寺院で、真宗寺院としては比較



三国町真宗寺院分布図

的前期の高田派寺院が、多くこれに属する。

第二は蓮如の北陸教化、特に吉崎布教を契機として真宗に帰依、あるいは真宗に改宗転派し、寺院を建立せるもので、文明以降に創建された本願寺系の寺院は、その殆どがこれに属する。その数は最も多く、三国港だけについて眺めても、前記永正寺の外、専了寺（大谷派、北本二丁目）・智敬寺（大谷派、錦四丁目）・専立寺（本願寺派、神明二丁目）等、十二か寺以上を数えることができる。

第三は江戸時代以降明治年間に創始された寺院で、最も後期のものである。初め、ある特定の大本寺に付属して建てられた堂宇または庵室が、後年寺院としての体裁を整え、改めて寺号を公称するにいたったものが、多くこれに属する。

三国港には前記の通り、文明年間、蓮如の吉崎布教を機に建立された本願寺系寺院が、極めて多いが、それ以上に注目すべきは、蓮如の吉崎布教にひき続いて起こった一向一揆に、大きな役割を果たした唯称寺・勝授寺の二か寺である。まず唯称寺、唯称寺はもと加賀三か寺（若松本泉寺・波佐谷松岡寺・山田光教寺）の一つ山田光教寺の一族であった。

加賀三か寺は、いずれも蓮如の子息が入ったいわゆる一家衆寺院で、蓮如以来加賀一向一揆を指導してきたが、本願寺九世実如が亡くなり、孫の証如に継承される頃から、その指導力が弱体化し、超勝寺・本覚寺との対立が深まった。享祿四年（一五三二）五月、遂に両者の対立が表面化し、いわゆる「大小一揆」の内戦が勃発した。享祿の錯乱と呼ばれる事件がこれである。

加賀三か寺側は、初め越前朝倉孝景の援軍を得て一時有勢であったが、その後越前勢の撤収によって戦意を失い、その幹部等は越前に亡命した。この時山田光教寺顕誓（蓮如の孫）は、越前国坂井郡布施田（現在は福井市）に一字

を建て、自閑坊じかんぼうと称した。彼は後に本山（本願寺）に籠居かごいしたこともあり、その著反故裏書はごのうらがき・今古独語は本願寺史として貴重な資料とされている。

この布施田の道場は、後三国湊に移り、慶長年間、本願寺教如に帰して東本願寺派となり、唯称寺（山田氏）を称して現在にいたっている。布施田在住当時、朝倉氏より仏田等を寄進され、布施田には今も花山・花島等の地字名が残っていることである。

さて永禄十年（一五六七）將軍義昭の仲介により、朝倉氏と本願寺の和議が成立、六十年に及ぶ加・越の争乱はようやく終わりを告げた。しかし長年にわたる加・越の闘争で、多くの戦力を消耗した両者は、信長軍の前に、いずれも敗れ去ることになる。

天正元年（一五七三）朝倉義景が信長に攻められて自刃した後、越前では支配者交代の間隙に乗じて、またもや一向一揆が猛威を振り始めた。一揆勢は富田長秀、朝倉景鏡等織田系勢力・朝倉系残存勢力等を次々に撃滅し、越前平定を殆ど完璧なものにした。

いっぽう長島一揆の攻略に成功した信長は、天正三年一〇万五〇〇〇余騎をもって越前に進発、杉津口すぎづぐち、木の芽針きのめばち伏峠ふしだの各所にて一揆軍を撃破しつつ、府中竜門寺に進出、一乗谷に入った。現存する三国町勝授寺（本願寺派、南本二丁目）には、この時鉢伏に立て籠った大町専修寺賢会の書状が一四通所蔵されている。これらは当時の一向一揆の実況を報じたものとして、実に貴重な資料である。

ここで大町専修寺の起源について述べておこう。真宗三門徒派本山専照寺の略縁起によれば、専修寺の開基如導は平康頼の曾孫といわれ、八歳で親鸞の弟子となり、法名を空如と称した。弘安八年（一二八五）越前に来て波多野通貞の庇護を得て、大町（福井市）に専修寺を創建した。法脈は親鸞―真仏―専海―円善―如導と続き、高田系三河門

徒の流れをくむといわれる。

専修寺賢会が鉢伏にて信長軍と戦い討死した後、その子唯賢等の遺族は加賀国諸江（現石川県金沢市）に逃れ、さらに越中御箇山（現富山県東砺波郡）にひそみ、天正七年（一五七九）越前中野村（現大野市）に帰住した。しかしその時には専修寺は廃寺となり、門末も殆ど京都興正寺の所属に変わっていたので、同年本願寺顕如から新たに勝授寺という寺号を下付され、同一七年（一五八九）三国湊に移った。

本願寺への忠誠を嘉された同寺は、元和八年（一六二二）永代院家の寺格を与えられ、また住持は代々宰相・中将を称して、超勝寺・本覚寺等と並ぶ越前真宗教団の幹部となった。

その後興正寺との門徒所属をめぐる反目が続ぎ、郡奉行の裁定によって、いずれへ帰属するかは、門徒の自由意思に任せられた。寛文五年（一六六五）、興正寺門徒の大野郡大谷・久沢の村民四〇名が、手次寺を誓念寺（現大野市）から元の勝授寺に変えようとして本山に訴えている。しかし興正寺が本山に訴え、結局本山の命によって、勝授寺は手次権を放棄した。

五 九頭竜川の水運と称名寺・唯称寺

九頭竜川西方の砂丘地（黒目）に称名寺がある。称名寺も、他の地方から避難亡命してきた寺院であり、避難亡命という点では、前記唯称寺・勝授寺と軌を一にしている。しかし称名寺の場合は、唯称寺・勝授寺のように一向一揆の内紛や敗戦によって、避難先を三国に求めたのではなく、寺族間の内紛に敗れ、現在地に逃れてきたのである。

称名寺は佐々木盛綱を開基とし、盛立山と号する。平安朝末期源平争乱の際、盛綱は弟高綱とともに源頼朝の幕下

に加わり、武功をたてたが、建永元年（一二〇六）盛綱五十六歳の時、親鸞の弟子となり西念さいねんと号した。

西念の子盛則もりのりは法名を光実こうじつといい、初め越前国東郷村とうごうむらにいたが、天福元年（一二三三）父西念の勧めに従って出家し、父子ともども親鸞の教えを奉信した。さらにその後建長元年（一二四九）には、下野国より越前に来遊した頭智の教えを受けている。

光実は諸国を巡歴した後、仁治二年（一二四一）越前に戻り、折立郷に坊舎を建てた。これが後の折立称名寺（現在足羽郡美山町）である。光実より六代目の頃、長兄と次弟が各々別の地に坊舎をかまえ、それぞれ南坊・北坊と称した。

九世鏡円の時、ついに南北両坊の対立が表面化した。鏡円の没後、その子法祐（当時三歳）は林泉坊という人物に庇護されて折立を脱出、府内・鴻の浦を経て米納津に来たり一字を建て、折立と同名の称名寺を名のった。法祐以後四代の間は米納津の地にいたが、風砂の害にたえられず、室町末期、十四世慧祐の代に再度黒目の地に寺を移した。

黒目称名寺となつてからも、初めは黒目の海岸寄り山手の方にいたが、ここもやはり風砂の害が甚しかったので、近世初期、三度九頭竜川寄り下手の、現在の地に移った。

これより先文明年間、隣国加賀に勃発した一向一揆は、やがて越前にも波及し、幾度となく朝倉軍と千戈を交え、さらに朝倉氏滅亡後は織田信長と対戦するにいたった。天下統一をめざす信長は、長島一揆の攻略に成功すると、天正三年（一五七五）八月、北陸の一向一揆平定をめざして越前に侵攻した。

信長軍に敗れた一揆の総帥下間頼照しもづかいしょうは、加賀国へ逃れようとして三国湊をめざして潜行したが、途中下野村で称名寺門徒に発見され、討捕られた。この時の称名寺住職が十四世慧祐である。慧祐は門徒が討捕った下間の首を、北ノ

庄（現福井市）の柴田勝家（じつげ）の実検に供し、感状を授けられている。称名寺が風砂の害のため、寺を黒目山手から現在の下野地籍に移したのは、慧祐の死後十五世慧伝、十六世慧林の時である。

称名寺が最終的に寺基を移した現在地は、九頭竜川沿いにあり、九頭竜川が日本海に注ぐ河口三国港に至るには、車で十五分ていで僅か五キロメートルほどの距離に過ぎない。この間を舟で行くとすれば、極めて短時間の中に三国湊に達することができる。

それだけではない。称名寺本堂の裏手には、片川（かたがわ）という小さな川が流れており、この川を北に向かって舟行しても、隣在所の山岸（のまきし）で九頭竜川に合流し、これまた短時間にて三国湊に達することができる。単に水運の便に恵まれているだけではない。本堂の裏手にて、片川に浮かぶ舟に身を投じさえすれば、川の流れを利用して、そのまま三国湊に行けるといふ気安さがかがえる。

称名寺の現在地から、九頭竜川沿いに南の方へ約五キロメートルほどさかのぼると、布施田（ふせだ）という集落がある。加賀国山田光教寺の一族が享禄年間、一向一揆の内紛に敗れて越前に亡命し、この布施田の地に一字を建立したことは、すでに述べた通りである。同寺はその後再び三国湊（現在地）に移っているので、布施田在住当時の跡地がどこなのかは明確ではない。しかし布施田が九頭竜川西方の川沿いに位置する細長い集落であることから考えて、その跡地が九頭竜川の、川の流れのすぐ近くにあったであろうことは、容易に推察できる。

称名寺の現在地に比べれば、やや遠距離にあるとはいえ、それでも三国湊までの距離は約一〇キロメートルに過ぎず、水運を利用して舟で下れば、一時間以内に湊に達することができる。

称名寺・唯称寺の二か寺はそれぞれの事情は違うが、いずれも他の地方より坂井郡内、三国周辺の地に避難亡命してきたという点では、同種の寺院である。そしてその定住地は、いずれも九頭竜川の河口に近い沿岸の地であった。

このことは決して偶然ではない。外敵に襲われた場合でも、門信徒の参詣を集めるためにも、水運の便に恵まれた九頭竜川河口に近いこの地が最適であり、そのような立地条件をそなえた所として、称名寺の場合は黒目の現在地が、唯称寺の場合は布施田の旧地が選ばれたのだろう。蓮如の、吉崎を北陸教化の拠点に選んだ理由の一つが、その水運の便のよさにあったのと、事情が似通っている。事実蓮如は文明七年（一四七五）吉崎を脱出する際、水運を利用し、舟で塩谷海岸から日本海を南下している。

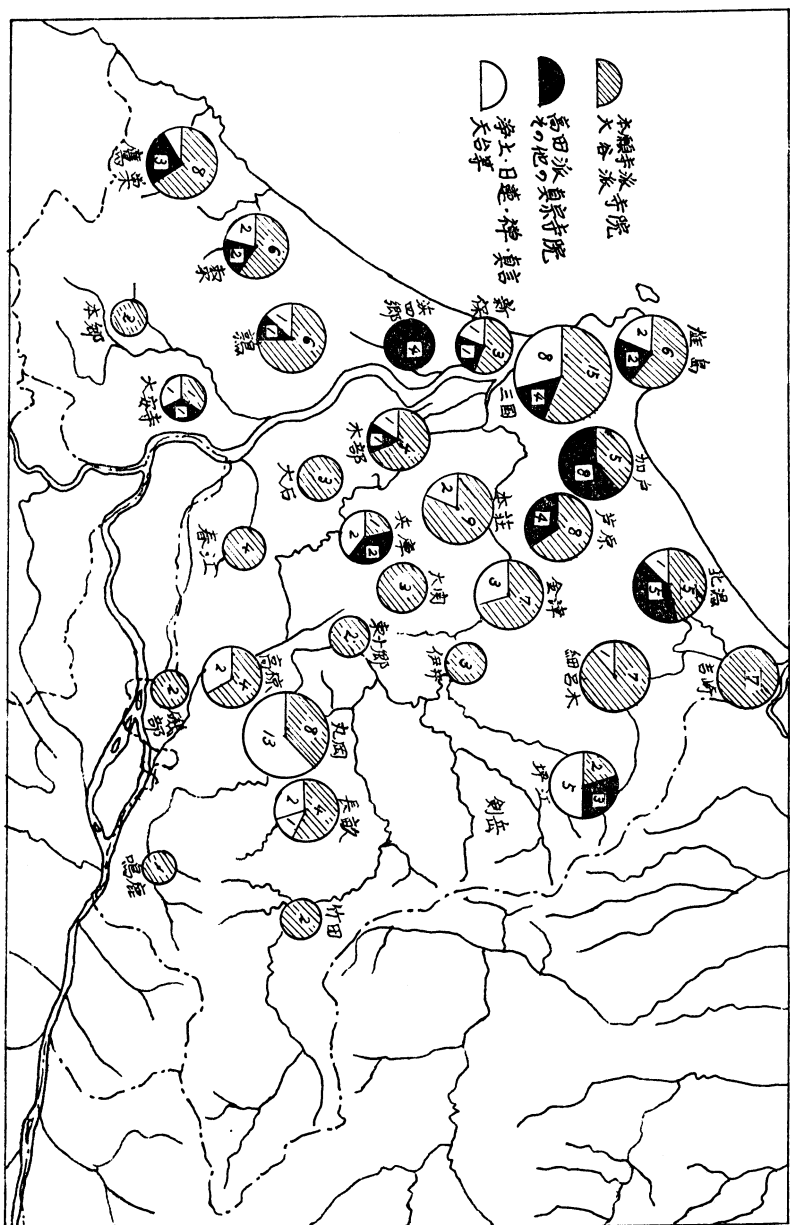
六 小牧道と高田派三か寺

すでに二、三国町各宗派の現況で述べたように、三国町で最も多い宗派は浄土真宗であるが、真宗の中では大谷派が最も多く、大谷派に次いで多いのが高田派である。しかも高田派寺院は三国町の中心部三国湊よりも、加戸・浜四郷等の周辺村落に多い。特に三国湊・吉崎間の小牧道沿いに位置を占める加戸地区には、本流院・常楽寺・松樹院の高田派三か寺が現存している。高田派の有力三か寺がいずれも加戸地区―加・越台地の一隅―に居を定めたというのは、果たして偶然だろうか。

今これら三か寺の起源について、寺伝を調べると、まず本流院は、開基波成野慈道が三国湊に、律宗の道場を開いたことに端を発する。その後慈道は親鸞の教化を受け真宗に転じ、三国湊の道場を加戸に移して円福寺と号した。移転の理由は明らかでない。

常楽寺は開基真傾が、北陸道を越後に下る途中の親鸞に面謁、その教化を受け、天台宗から真宗に転じた。寺基を加戸地区に置いた理由は、やはり明らかではない。

三国町周辺の寺院分布図



松樹院は開基願明が、親鸞越後流罪にて北陸通過の際、面謁してその教化を受け弟子となり、三論宗から真宗に転じ随応山専光寺と改称した。専光寺の所在地は、新郷角屋村（現芦原町）であった。願明から数えて八代目定如の時、朝倉孝景から現在の嵩の地に寺地を賜わり、寺基を角屋村から現在地に移し、新郷山専光寺松樹院と号した。

以上述べた通り、加戸地区の高田派三か寺は、いずれも北陸通過の際の親鸞に面謁、その教化を受けたことを以て、真宗に転じた動機としているが、それ以前の宗派は、本流院は律宗、常楽寺は天台宗、松樹院は律宗と、まちまちである。また朝倉氏から土地の寄進を受けたという寺伝は、松樹院の場合にしか認めることができない。

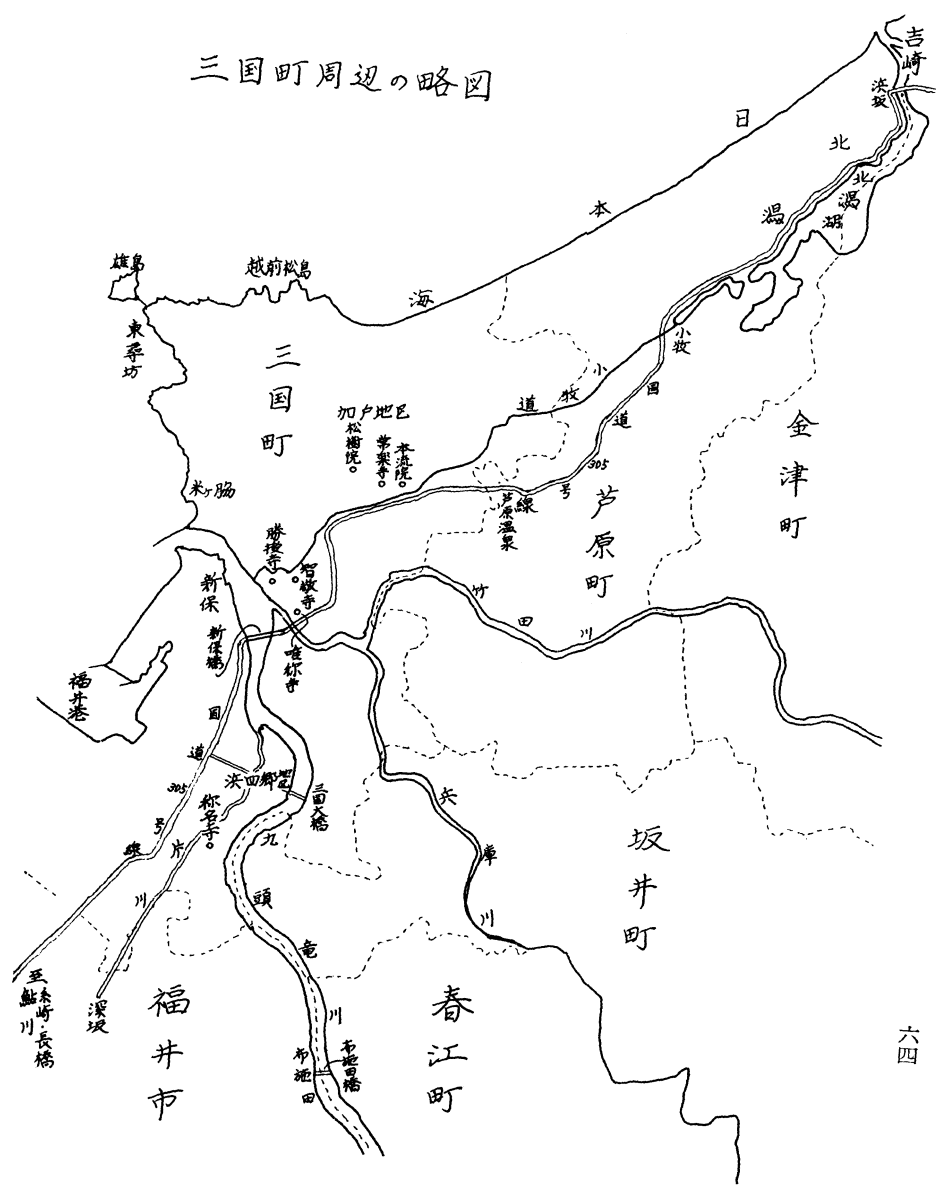
しかしそれにしても、戦国時代高田派寺院と朝倉氏の間に、密接な関係があったことは確かである。たとえば本流院真孝の内室と、坂井郡本莊城主堀江景忠の内室と、朝倉義景の母堂の三人は姉妹の間柄で、ともに若狭守護武田氏の娘であった。永禄一〇年（一五六七）堀江景忠が、加賀の一向一揆と通じて朝倉氏に叛いた時、本流院真孝はその仲介人として両者間の調停に乗り出し、堀江氏を能登に亡命させているが、それはこのような本流院真孝と朝倉氏間の姻戚関係があったればこそ実現できたのである。

また永正三年（一五〇六）、加賀一向一揆が越前に来攻した時、高田派諸寺が本流院真孝を中心に結束して朝倉軍に加わり、一揆の撃退に加勢したことは、『朝倉始末記』にも見える著名な史実である。

以上述べたような、高田派寺院と朝倉氏の密接な関係を前提として、高田派三か寺が加戸地区に寺基を置いたことの理由を、私は次のように推論する。朝倉氏是一向一揆との戦いに備えて、当時同じ真宗でありながら、本願寺と敵対関係にあった高田派寺院を、小牧道沿いの加戸地区に置き、本願寺に同心する坊主・門徒等の、吉崎への出入を監視させたのではないか。

あるいは更に推測を進めるならば、一揆との戦闘に備えていつでも出陣に参加できるよう、高田派寺院に待機させ

三国町周辺の略図



ておこうという意図も、そこに働いていたのではなからうか。

これはあくまでも私の推論に過ぎないが、しかし近年、私のこのような推論をある程度裏付ける傍証が見付かった。すなわち福井市在住の加戸義信氏（福井銀行本店勤務）によれば、同氏の先祖は元京都の住人であったが、天正年間信長越前攻略の際、信長の命により越前に下向し、加戸に城塞を構え、此処から越前平野を眺望し、吉崎に通じようとする一揆の動向を監視した。

一揆討滅後その功により、加戸という姓を賜わったが、彼は加戸地区には定住せず、北ノ庄（福井市）に出て商人となり、呉服町で放籠（はたて）（旅館）を営んだという。

思うに加戸地区は北に日本海を臨み、東に坂井平野を擁する加越台地に位置し、まさに天然自然の要害の趣きがある。しかも三国湊から吉崎に通じる小牧道沿いにあり、かつては交通上の要所でもあった。一揆の動静を探るには、誠に絶好の地理的条件を備えているではないが。

時代は前後するが、信長が加戸氏の先祖に命じて、加戸地区にて一揆を監視させたように、朝倉氏も高田派寺院を此処に置き、一揆の動きをうかがわせたのではないか。現在は小牧道の南側を、小牧道とおおむね平行して、国道三〇五号線が走っている。

七 智敬寺の蓮如忌

蓮如が開いた吉崎では、毎年四月二三日から五月二日までの一〇日間蓮如忌（御忌）^{ぎよき}が営まれる。この時吉崎の蓮如忌と平行して、三国港智敬寺（大谷派、錦四丁目）でも蓮如忌が営まれる。そしてこの期間中、三国町あるいは三

国近郊の人で、吉崎参りを望みながら吉崎にまで足をのばせぬ人たちは、吉崎参りの代りに近吉崎ちかよしきと呼ばれる智敬寺の蓮如忌に参詣する。

智敬寺の蓮如忌は、吉崎の蓮如忌と同日の四月二十三日に始まる。そして五月二日までの十日間、大谷派作法に従い、晨朝じんちよう・日中にちちゆう・逮夜たひや・初夜しゆやの順に勤行及び説教がある。勤行はいずれも正信偈しやうしんぎである。また日中と逮夜の中間午後一時頃から、内陣余間にかけられている蓮如絵像について、住職により、いわゆる「御絵説き」が行なわれる。

智敬寺の蓮如忌が何時頃から行なわれるようになったか、またどのような事情で始められたかは、詳細不明である。寺伝によれば同寺の開基は延暦寺第三世良源りやうげん（慈覚大師じかくまたは元三大師げんさん）といわれ、初めは天台宗であったが、二世祐慶ゆうけい以来真宗高田派に所屬し、さらに八世祐賢の時吉崎の蓮如に帰依して、本願寺の末寺になった。

祐賢は蓮如より絵像と名号を賜わったといわれ、あるいはまた、蓮如が吉崎在住の間に智敬寺を訪れ、二箇月ほど逗留し、寺族一同の手厚いもてなしを受けたとも、いわれている。このような蓮如に対する絶対帰依の感情が、何時の間にかこの寺の伝統として、毎年吉崎の御忌と同時に蓮如忌を営むならわしとなり、現在まで存続しているのだから。

ところで智敬寺の蓮如忌の盛況は、同寺の地理的位置によるところが大きい。すなわち智敬寺の境内の横手を通るいわゆる薬師道やくしだうは、小牧道に連なり加戸・芦原あはら・北潟きたがたを経て、吉崎に達する。小牧道が三国湊と吉崎を結ぶ重要なルートであり、朝倉氏がこれを重視し、此処に高田派三か寺を置いて、一向一揆の動向を監視させたという推論については、すでに六、小牧道と高田派三か寺の中で述べた通りである。

智敬寺が小牧道に近いことから、鮎川・長橋・糸崎方面の門信徒が吉崎に参詣する際には、途中同寺に立寄って一泊し、通夜を行なうのが恒例となった。そして翌日同寺を出発、薬師道から小牧道に出て吉崎までを徒歩で往復する

訳である。このように、遠隔地の門信徒にとって智敬寺は、近吉崎の呼び名が示すように、吉崎参りのための最も有利な位置にあり、いわば吉崎への中継所ともいえるべき役割を果たしていた。智敬寺を中継所として吉崎参りをする遠隔地の門信徒は、やがて吉崎の蓮如忌に参詣する代りに、近吉崎の御忌に参詣することですまそうということになり、そのことが一層、智敬寺の御忌の盛況をうながす結果になったものと思われる。

自家用車の普及している今日では、三〇キロメートルや四〇キロメートルの道のりを経て吉崎に達することは、それほど困難なことではない。しかし徒歩で吉崎参りをした昔の人にとっては、それは大変な苦勞であった。昭和の初期頃、吉崎参りを志す善男善女は、三国港から小牧道に入り、加戸、芦原を経て北潟湖の南端小牧まで歩行し、これより先は北潟湖を舟で渡り、吉崎に赴いた。この北潟湖の舟行は、それまでの歩行による疲勞を癒したばかりでなく、吉崎参りの観光ムード・遊山気分を、大いにもり上げたものである。

むすび

以上、三国町に現存する真宗寺院の成立事情について一覽したが、この中で特に注目したいのは次のような点である。

一、性海寺（真言宗）・妙海寺（日蓮宗）・唯称寺（大谷派）・淨願寺（大谷派）等三国湊初期の寺院は、いずれも標高三〇メートル程度の丘陵を背後にして發展した上ミ町・中町・元町等の早期集落形成の中で誕生した。

二、中世末から江戸時代に入ると、三国湊の集落は上手から下手にかけて徐々に發展をとげ、後には山側の台地にまで開發が延び、上ハ新町が成立したが、寺院もこのような集落形成に相應して、上手から下手にかけて建立さ

れていた。

三、唯称寺（大谷派）・勝授寺（本願寺派）の二か寺は、いずれも一向一揆に関連して、他の地方より当三国湊に避難定住した寺院である。

四、称名寺（高田派）も寺族間の内紛によって、現在地に亡命移住してきた寺院であるが、唯称寺と同様、九頭竜川の河口で近い川沿いの地に、移住先を選んでいる。それは水運の便を配慮していることと思われる。

五、本流院等高田派有力三か寺が、いずれも加戸地区に建てられたのは何故か。朝倉氏が、吉崎と通じる一向一揆の動向を監視させるために、小牧道沿いの加戸地区に、高田派寺院を置いたのではないか。

六、智敬寺の蓮如忌について眺めても、その盛況を促した一つの大きな理由は、小牧道に近い同寺の地理的位置にある。智敬寺は遠隔地の門信徒にとって、吉崎参りのための中継所であった。

前記一〜六の各頃は、三国町における寺院の創建、特に真宗寺院の創建が、地理的要因にもとづくこと大であり、あるいは陸上交通・水運の便と深く関連していることを、具体的に示している。

主要参考文献

- | | | |
|------------|-----------|-------|
| 笠原 一男 著 | 蓮如・一向一揆 | 岩波書店 |
| 井上 鋭夫 著 | 一向一揆の研究 | 吉川弘文館 |
| 井上 鋭夫 著 | 真宗史概説 | 平楽寺書店 |
| 赤松 一俊 編 | 初期真宗の研究 | 永田文昌堂 |
| 笠原 一男 編 | 中世真宗思想の研究 | 吉川弘文館 |
| 宮崎 圓 著 | 福井県の地名 | 平凡社 |
| 重松 明久 著 | | |
| 日本歴史地名大系一八 | | |

印 牧 邦 雄 監 修
辻 川 達 雄 著
辻 川 達 雄 著
三国町民調査・町並調査
報告書

市町村で見る
福井県の歴史
蓮如―吉崎布教
本願寺と一向一揆
三国町の民家の町並

東京書籍
誠文堂新光社
誠文堂新光社
三国町教育委員会
三国町郷土資料館